

『天下にこの名のほか』 井上隆晶牧師

使徒言行録 4：5～14、マタイ福音書 10：26～31

①【ペトロの大胆な態度に驚く指導者たち】

ペトロとヨハネは、神殿の美しい門のそばに置かれて、人からの施しを受けて生きて来た、生まれながら足の不自由な人を癒しました。それを通してイエス様こそ本当のメシアであるということを神殿の中で民衆に語っていると、祭司長、サドカイ派、神殿守衛長といったユダヤ教の指導者たちに捕えられ、牢に入れられ、翌日議会で取り調べをうけることになりました。指導者たちは「お前たちは何の権威によって、だれの名によってああいうことをしたのか」（7 節）と尋問しました。ユダヤ教の秩序を乱す者として、勝手に宣教したことをとがめられたのです。彼らはペトロたちに理屈では勝てないので、この世の「権力」で押さえつけようとしたのです。するとペトロは聖霊に満たされ「この人が良くなって、皆さんの前に立っているのは、あなたがたが十字架につけて殺し、神が死者の中から復活させられたあのナザレの人イエス・キリストの名によるものです。」（10 節）「ほかのだれによっても、救いは得られません。私たちが救われるべき名は、天下にこの名のほか、人間には与えられていないのです。」（12 節）と答えました。これはものすごい信仰告白です。三年前までガリラヤ湖で魚を取っていた無学な普通の男が、学者や世の権力者を前にして、確信を持ってどうどうと「イエス様しか人を救えない、この方の名前を呼ぶしかない」と答えたのです。議員たちは「その大胆な態度を見、しかも二人が無学な普通の人であることを知って驚いた」（13 節）といいます。結局、指導者たちは、これから決してイエス様の名を口に出したり、イエス様の名によって話したり、教えたりしてはいけないと脅すことしかできませんでした。

キリスト教の歴史を振り返ってみると墮落と改革が交互に起こってきているように思います。教会が大きくなり、この世の富や権力や発言力を得るようになると墮落します。するとそこからキリスト教の原点に帰ろうとする修道生活をする小さな群れが生まれてきます。小さく貧しいからこそ神だけに頼ります。教会は大きくなるのが大事ではなく、純粋なものが説かれ、原点に返って、キリストを仰いでゆくことが命です。キリスト教の命を失ったら何にもなりません。初代教会はこの世の富も権力も持っていませんでしたが、神からの力と命を持っていました。パウロは「私たちの戦いの武器は肉のものではなく、神に由来する力であって要塞をも破壊するに足ります。」（Ⅱコリント 10：4）と語ります。この力は祈らなければ得ることはできません。聖霊が与える力です。今の教会は祈らないで、この世の知識や情報を得て語っているように思えます。この世の状況を正しく知ることは出来ませんが、最後は、私たちも頑張って人を愛しましょうとなり、結局、道徳で終わります。しかし、神に対する確信がないので人に伝わりません。

本人が心から信じていないのに、他者が信じるわけがありません。「確信に基づいていないことは、すべて罪なのです。」(ローマ 14 : 23) 聖霊が人の中に入ると恐れを取り除き、キリストに対する確信を与え、大胆に宣教させる力を与えてくれます。生まれたばかりの小さな教会は大きな確信だけは持っていたのです。自信のある人は小さくても大きく見えるものです。この神に対する確信を得るということが大事なのです。

②【イエス・キリストの名で呼ばれる者とされたこと】

皆さんはなぜ教会に来たのでしょうか。それはここが「イエス・キリストの名」を掲げているからだと思います。私たちはキリストを求めてやってきたのです。「キリストなら私を救ってくれる、私の病を癒してくれる、キリストなら私の苦しみを取り除いてくれる、キリストなら何とかしてくれる」と思ったからだと思います。「イエス・キリストの名」がつけられたゆえに、私たちのこの小さな、貧しい教会も人々に信頼されたのです。この「イエス・キリストの名」のゆえに、無力なこの教会も大いなるものとされているのです。そして皆さんひとりひとりも「イエス・キリストの名」で呼ばれる者となりました。キリスト教徒のことをクリスチャンと呼びますが、これは「キリスト者、キリストのもの」という意味で、本来馬鹿にした呼び名だったのです。「アンティオキアで、弟子たちが初めてキリスト者と呼ばれるようになったのである。」(使徒 11 : 26) 自分のような者に「イエス・キリストの名」が用いられても、キリストは私を恥としませんでした。それを喜ぶたいと思います。どんな弱い者も、どんな貧しい者も、どんな罪深い者も「イエス・キリストの名」がつけられたがゆえに、悪魔は退き、天使はひざまずきます。私たちはキリストの名によって高められたのです。「この人をイエスの名が強くしました。」(使徒 4 : 16) とある通りです。

③【キリストは本当に私たちを愛して下さる】

私は平日の朝、礼拝堂に立って神の名を呼び、祈りをしている時が一番平和を感じます。それと聖餐式の時にパンとぶどう酒を口にした瞬間、一番「ほっと」します。18日に高齢者施設に行って礼拝をし、聖餐式をしました。その時も、パンを口にした時、「ほっと」しました。子どもの頃の、あの何も不安がなかった楽しかった日々、毎日を信じきって生きていた日々を思い出しました。両親の愛を信じ切っていたのです。幼い子供たちは、両手を回して母親にしがみつきます。それで安心するのです。その心です。キリストと聖霊が共にいてくれたら安心するのです。キリストによって私は失っていた安心を取り戻したのです。

●大阪の谷町四丁目にルーテル教会があります。そこのある女性信徒さんの証しを聞きました。彼女は学生の頃、自分が子どもを産めない障害があることが分かりました。そこで救いを求めているいろんな教会に行きます。エリサベトにもサラにも子どもを与えたのに、どうして私を救ってくれないのか。救い主なら休ませる

だけでなく、どうして解決してくれないのか、イエス様を信じてても奇跡などない、と反発します。またいろんな人の善意の言葉に腹が立ち、つまずきます。「私は反キリストになると、心に強く思った。偶像崇拜もしたし、インチキ占い師にもなったし、教会の悪口を多くの人に言いふらした。」ある日、彼女は夢を見ます。その時、呼吸をしていなかったそうですが、イエス様に会い「Kよ、私の父なる神は、あなたが天国に帰ってくるのを信じて、戸を開けて待っているのですよ」という声を聞き、目が覚め、呼吸が戻った彼女は、涙が止まらず、肩を震わせて泣きました。「私はすごく愛されている！そう思った。私は生まれ変わった。自分で伝道チラシを作り、ポスティングをした。」ある日、彼女は末期の癌患者Mさんに会います。彼女は彼にこう言いました。「ベテスダの池にいた人は病気が治ったのにイエス様を信じませんでした。シロアムの池に行って目を洗った人は、病気が癒されてイエス様を信じました。イエス様の十字架の隣にいた強盗は、十字架から降ろしてもらわなかったのに悔い改めてイエス様を信じました。この三人の中で誰が一番すごい人だと思いますか？Mさんはモルヒネ剤を使う痛みの中でもイエス様を信じていますよね。十字架から降ろしてもらっていないのに、信仰を捨てていません。あなたこそパラダイスにいます。私もそんな信仰が欲しいです。」Mさんは「ありがとう」と言って泣き崩れました。…ああすごい平安、重荷を休ませていただけた、と主に感謝している。

この世は理不尽です。クリスチャンの精神科医の息子さんが自死された時、彼は私に「この世では信仰していても何でも起こることが分かった」と言いました。これがこの世の真実です。

ユダヤ人たちは苦しみが無くなるのが救いだと思い、この世のカルト宗教はそろって苦しみからの解放を約束します。しかしキリスト教は苦しみからの解放を約束しません。「あなたがたには世で苦難がある。しかし勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている。」(ヨハネ 16:33)と主は言われました。苦しみは本来、神様がお造りになった世界にあってはならないものです。しかし人間の墮落と共に苦しみは入ってきました。苦しみはこの世では無くなりません。墮落したこの世界では不可能です。そこで神様は人間を奇跡によって救うのではなく、苦しみを連帯するという方法で人を救おうとされたのです。「神は、…苦難の時、必ずそこにいまして助けてくださる。」(詩編 46:1)とあります。

ひとつだけ確かに言えることがあります。苦しみはあります。理不尽なこともあります。それでも神の愛は変わりません。神はあなたを愛し、あなたと共にいて下さいます。そしてやがてあなたの全てを背負い、あなたを抱いて神の国に上られるでしょう。私たちもペトロのようにイエス・キリストの名を誇りとしましょう。この方の愛を誇りましょう。キリストと共にこの世を歩む平安を味わいましょう。